

第2回館長講座 「イラン Lameh-Zamin 遺跡の発掘 1978年6月～9月」

今、イランは大統領選挙の最中。私がイランに行ったのは現在の体制となる前で、まだイラン帝国、パーレビ皇帝の最末期だった。その当時のイラン歴は紀元前550年が元年で、キュロス大王がメディアを滅ぼしたペルシャ帝国建国の年としていた。

東京大学イラン・イラク学術調査団の調査

そもそもなぜイランの調査が始まったのか、簡単にまとめると、正倉院のガラス碗がシルクロードを通じてもたらされただろうと考えられていて、テヘランのバザールでこの仲間が売られていたのを見つけ、これが盗掘されたのだろうということでその出所を追及していったところ、イランのテヘランの北のエルブルス山脈の中のデーラマン地方であることが突き止められ、ここでの発掘調査が始まった。

第1期はこのデーラマン地域のテル遺跡が調査されたが、なかなか例のガラス碗につながるものは見つからなかった。1976年から、第2期の調査でデーラマン近くのハリメジャンという村に居を定め、周辺の墓地遺跡の調査をおこなった。私の参加した1978年は、ハリメジャン村近くのパルティア・ササン朝期の墓を掘るということで誘われ参加することにした。今まで金銀財宝というのは掘ったことはないし、パルティア・ササンの墓なら金製品の可能性もあるだろうと勝手に思い込み参加した。しかし現地に行ってから実際に掘ったのはこれから紹介するような墓地遺跡だった。

調査団メンバー

◎深井晋司（美術史）	古山学（考古学）
○松谷敏雄（考古学）	千代延恵正（考古学）
杉山二郎（美術史）	新田栄治（考古学）
関口正之（美術史）	鷹野光行（考古学）
田辺勝美（美術史）	鈴木隆雄（人類学）

調査中の宿泊地としたハリメジャン

ハリメジャンはこのように緑の中にある。

ラメ・ザミン遺跡

発掘したラメ・ザミン遺跡はパイプライン敷設のために道を作っていたときに見つかった。ハリメジャンはこの尾根の向こう側で、尾根をまたいで無理矢理作られた道を通って通った。

遺跡のすぐ近くを流れる川はセフィードルード、白い川という意味だそうである。川の流域には田んぼが広がり、ザクロもなっていて蛙の声も聞かれ、あとは柿がなっていれば

全く日本の農村風景と同じだ、と思った。

「ラメ・ザミン遺跡第一地点」

発掘候補地にはこのように凹みがいくつも残っており、これは紀元前 1000 年頃の墓が埋まりきらずに残っていると思い込んで掘り始めることとした。カットされた道路沿いには穴の断面が見られた。

表土をはがして凹みのところを掘り始めることとしたが、作業員として雇った近くのシャハラン村の人たちの様子がなんとなくおかしい。私は言葉がわからないので彼らが何を言っているのかわからない。

おあつらえ向きに穴には石も置かれていて、墓だ、間違いないとして掘る。上の方で帽子をかぶり指示をしているのは副団長で発掘の指揮を執る立場の文化人類学の松谷さん。掘り上がった穴の一つ。この穴の壁を見ると掘るのに使った工具の跡が見える。これで紀元前 1000 年紀の工具が復元できる、と意気込んだが・・・。

作業員の人たちが言っていたことは、ここはもう自分たちが掘った跡だ、ということだったそうで、ペルシャ語のわかる人が何人かいたにもかかわらず作業員たちのいうことに耳を傾けずに作業を続けさせた調査団の上の方に人たちへの不信感を持った。つまり彼らが盗掘した跡をもう一度掘っただけだったのだ。そして壁の工具の跡もあとでバザールの店で見た手斧の刃先と同じ大きさだった。

ラメ・ザミンⅡ 全体図

ここはまだ掘っていない、という村人たちのいうことを今度は聞いて発掘地を移し、ラメ・ザミン遺跡第2地点(LZⅡ)とし、地表に露出する石も目安としながらこれだけの墓を発掘した。このうち、LZ102、104、105、108、110、112を担当した。

ケルン(石組み)は墓の目印

地表からボーリング棒を刺し、石に当たるとそこを広げるとケルンが出てくる。この下に竪坑があり、下の方で横に広がる。長靴の形の墓壙。

LZ101 成人 男性

LZ102 こども

副葬品の豊富なこどもだった。大形浅鉢の上の骨は鳥の骨。浅鉢を取り除くとしたから銅製ナイフ・ゲームピースも出てきた。特別なこどもなのだろうか。

LZ103 成人女性

この人も副葬品が豊富だった。

LZ104 こども

頭骨が頭頂部を下にしているので、座って葬られていたものだろう。

LZ105 成人女性

副葬品に、蓋付き小壺・把手付壺・紡錘車があり、105は102の墓に一部壊されており、本来この墓に副葬されていた片口が102内に落下していた。

LZ106 成人男性

本来こども用の墓壙である四角い穴に押し込められたような男性で副葬品も1個だけ。

LZ107 成人 男性

LZ108 こども

左下のような断面の墓だったが、横穴部分の天井を残して掘っていたところ、副団長がやってきて、「掘りにくいだろ、僕が掘ってあげるよ」といって穴の状況をできるだけ確保するために残してあった天井をさっさと掘り崩し、このように上から見えるようにしてしまった。遺跡は掘ればいいのではない、調査者がわかればいいのではないはずなのに、掘りにくいから、わかりにくいからということで簡単に穴を破壊してしまう無神経さ、にムッとし、同時に彼が掲げていた文化人類学なる学問への不信感も持ってしまった。

LZ109 こども

大人とほぼ同じ形態の穴になっており、しかもほかのこども違って横向きに寝かされていた。右の耳に青銅のコイル(ふた巻)上の耳飾りがあった。当然左耳にも、と期待したが、左耳にはなかった。

LZ110 こども

こども横向きに寝かされていた

LZ111 成人 男性

大人の墓でここだけ副葬品がなかった。

LZ112 乳児

わずかに頭骨が残るだけ。穴の壁は明瞭ではなく、どこまでも掘れそうだった。失敗例かも知れない。

年齢と墓穴のまとめ。

成人 楕円形墓壙 仰臥屈葬

こども 方形墓壙 座葬

例外 106 109 (110) 112

副葬された土器の器形

A 把手つき小壺 B 台付鉢 C 把手付長頸壺 D 双把手付鉢 E 把手付壺
P 双把手付平底球形壺 Q 片口 R 平底球形壺 S 広がる口を持つ把手付壺
X 平底球形広口壺

Lameh Zamin 第2地点の土器 -Dailaman, Ghalekuti との比較

デーラマン地域で調査されていたガレクティ遺跡1号丘、2号丘の墓出土土器と類似性が強く、比較することができた。

LZ II 出土土器の器形の分類

- P・Q・R・S : おとなの墓出土
- A・B・C・D・E : 子どもの墓出土
- X : 両者に共通する器形
- 特殊形 (上のいずれにも入らないもの)
- Ghalekuti と共通するもの
P・Q・(R)・S・A・B・C・E・特殊形 105
- Ghalekuti にないもの D

ガレクティの1号丘、2号丘の墓、特にC1号墓出土土器が手がかりとなった。

遺構の切り合いから 105→102 の関係が把握できている。

105の土器の検討

Qタイプ : 101・103にもあるが、整形方法などから見てそれらより古式と位置づけられる

Ghalekuti C I 号墓の Q では

I 層出土 Q=101・103 Q

II 層出土 Q=105 Q

C I 号墓は層位の上下関係があり、蓋石(?)を境に上下に区分できる

そこで Q タイプにより、105・C I の II 層→101・103・C I の I 層

105のSタイプには貼り瘤があり、貼り瘤のある土器は104のB・107の特殊形。

104の土器

Aタイプ : 粘土ひもを円形にして取り付けの把手で、断面形状が正円形ではなく、同じ形のモノが Ghalekuti A-V にある。

Aは110にも2個あるが把手の形に違いがあり、断面形状が正円形は Ghalekuti I-6 にある。

Xタイプ : 直立・丸い断面の口縁部で Ghalekuti に多い。A-I・I-2・A-V・A-VIII

102のXは外反・断面三角の口縁部で口縁部の形に違いがある。101・109が同じ

108の土器

102とB・C・D・E が共通の器形 BとDは瓜二つ

Dは Ghalekuti にはない器形だが、特殊形 105 との共通性=Dの前段階?→D'

D' : C I のIV層(下層)・A-III・I-9・105

以上より 105→102・108・110

106の土器 : P しかなく位置づけ困難

紋様要素の違い

貼り瘤 古い方の要素 104・105・107・T9・T4・BIII

刻紋 101・102・103→ 新しい方

墓の2分

	Lameh Zamin	Ghalekuti
前半	104・105・107	AI?・AII?・AIII・AV・AVII・AVIII?・B III・CI 下層・CII・II1?・II4・I-1?・I-2・ I-7?・I-8?・I-9
後半	101・102・103・108・ 109・110	A4?・AVI・CI 上層・CIV?・I-3?・I-6・ I-10?
不明	106	B IV・CIII・II7

放射性炭素年代測定結果

105 : 2390±370BP, 2500±110BP

101 : 3360±130BP

103 : 2760±60BP

109 : 2600±170BP, 3150±110BP

ここに示された数値による順番と、上に述べてきた編年とは異なる。どちらが正しいのでしょうか。